慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 日本におけるゴドウィン研究史（続） |
| Sub Title | History of the studies on William Godwin in Japan (continued) |
| Author | 白井, 厚 |
| Publisher | 慶應義塾経済学会 |
| Publication year | 1967 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.60, No.8 (1967. 8) ,p.969(135)- 977(143) |
| JaLC DOI | 10.14991/001.19670801-0135 |
| Abstract | |
| Notes | 資料 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19670801-0135 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

（4）ケネーは自然法を物理的 physique な自然秩序と、それに規定されるところの道徳的 morale な秩序（＝人間行為の規律）の二つに分け、つぎのようにいっている。「あらゆる人間の権力は、神によって制定されたこの至高法則に従わねばならぬ。……この法則はあらゆる実定法の根本をなす規律である。なぜなら実定法は、明らかに人類に最も有利な自然的秩序に関する管理の法にすぎないからである。」Ibid., p. 375. 訳同七七頁。

（5）平田清明「経済科学の創造」岩波書店、この著書のケネーとルソーの対比のしかたは、基本的には正しいといってよいと思う。ルソーとケネーは、革命主義と保守主義という単純な対比では理解されない。このようなとらえ方は多分、重農主義を「封建反動」ととらえる立場と関係があるかもしれない。二人はともに、封建的土地所有の中への商品関係の滲透を、それぞれことなった視点でとらえている。ルソーは商品関係本来の形式の面から。ケネーはむしろその内実の面から。

このようにルソーとケネーを、商品関係の把握という点で同じ路線に接近させることはそれ自体としては正しいが、その余りに、二人の思想上および視点の差をぬりつぶすことの危険は指摘せねばならぬ。㈠ルソー・法表象、ケネー・経済的諸関係、㈡ルソー・人間の意志にもとづく契約社会の成立、ケネー・人間の意志を超えた神の秩序、㈢ルソー・歴史の一定段階での契約成立、ケネー・歴史の不在、永久不易の神の秩序。

（6）F. Quesnay; ibid., p. 371. 訳六九頁。

（7）Mirabeau; Eloge funèbre de M. François Quesnay, p. 7.

（8）"lois souverains", F. Quesnay; ibid., p. 375. 訳七七頁。

（9）平田清明、前掲書二一五頁。しかしこのことはケネーが社会をその法表象においてではなく、経済的秩序として明確に把握したことからすぐ出てくることである。

（10）F. Quesnay; ibid., p. 375. 訳七七頁。

（11）Emile, Oeuvres complètes, tome IV, p. 151. 訳中巻一三八頁。

（12）Ibid., p. 167. 訳中巻一五一頁。

資料

# 日本におけるゴドウィン研究史（続）

白井厚

一　マルサスの紹介
二　福田徳三
三　河上肇
四　土田杏村（以上五九巻三号）
五　無政府主義思想史研究（五九巻六号）
六　人口論史研究（以上本号）

## 六　人口論史研究

前回に記したように、日本におけるアナキズム研究の水準は全体に低い。そしてその中でも、特にゴドウィンに対する関心が乏しい理由としては、直接行動の原理を求めた日本のアナキストにとってゴドウィンの思想は全く不適当であったということと、また先進国のアナキスト自身が、たとえばプルドンやバクーニンはゴドウィンについての知識をほとんど持たず、また彼を高く評価したクロポトキンも、彼に影響されたというのではなく、その思想が形成されたのちに彼との類似性を知ったにすぎないので、ゴドウィン研究を怠っていたということが考えられる。こうして、アナキズム研究におけるゴドウィン論は、断片的な概説の範囲にとどまっていた。

これに対して、日本においてゴドウィンに対する認識が比較的進んでいたのは、マルサス研究を中心とする人口論史研究の分野であった。前々回の冒頭で触れたように、わが国では経済学史研究の水準が高く、その中でも近代国家形成期における人口論の重要性は早くから認識されてマルサスが紹介され、しかもマルサスはその「人口の原理」において、ゴドウィンをその第一の論敵として正面から攻撃を加えていたため、人口論史研究においては、他の分野以上にゴドウィンに対する関心が強かったのである。

＊　＊　＊

マルサスの「人口の原理」が明治初期に紹介されてのち、大正に入って一九一六年（大正五年）、マルサス生誕百五十年の春を迎え、京都法科大学はその記念講演会を催し、その内容を「経済論叢」（第二巻第五号）に再録した。それは、まるさす先生略伝（内田銀蔵）、まるさす人口論要領（河上肇）・まるさす人口論ノ研究方法ニ就イテ

（財部静治）、まるさす人口論出版当時ノ反対論者特ニ生存権論者（福田徳三）、まるさす以後ノ人口論（米田庄太郎）、新まるさす主義（神戸正雄）、人口論ノ学問上ノ性質（戸田海市）、馬ト人ノ人口受胎術ヲ論ジテ「人口論」ニ及ブ（石川日出鶴丸）、支那及日本ノ人口論（滝本誠一）、徳川時代ノ人口（本庄栄治郎）、社会階級別ト出生率トノ関係（高田保馬）、欧洲戦後ノ人口（小川郷太郎）、まるさす及ビ人口論関係書目、まるさす生誕百五十年記念会記事、という大部のものである。

この中で河上は、「人口の原理」の各版の差を検討し、初版と二版以下の差について、「今余ハ此ノ如キ見解ノ相違ヲ生ズルニ至リシ原因ヲ以テ、まるさすガ物的人世観ヨリ心的人世観ニ近寄リシガ為ナリト信ヅル。」（二七ページ）「此ノ如ク人口論全体ノ結論ガ、社会ノ改良ハ絶望デハ無イト云フコトニ為ツタノデアル。ソコデ最初ハ専ラごどゐん等ノ理想社会論ヲ攻撃スル為ニ著サレタ氏ノ人口論ハ、第二版以下ニ於イテハ殆ド其攻撃ノ的ヲ失ツテ仕舞ツタ……」（三一ページ）と述べるが、道徳的抑制についてのゴドウィンの影響については触れていない。

一方福田は、生存権にもとづく経済政策の立場から、マルサスの「人口の原理」に対する反対論者のうち生存権の主張に基いて立てられた反対論を最も重視し、「まるさすノ人口法則ガ社会政策ノ理想ト一致シ難キ所以ヲ最モ十分ニ指摘シタルモノハ別人ニアラズ彼ガ畢生ノ論敵タルうゐりあむ、ごどうゐん其人ナリ」（六ページ）という。そしてマルサスとゴドウィンは共に「人間の完全性」という先天的範疇について議論を応酬したにすぎないが、「然レトモ今日ノ吾人ヨリシテ之ヲ見レバ、『人間ノ完全性』云々ニ関スル討論ノ多クハ無用ニ属スルヲ認メザル能ハザルト同時ニ其討論ノ中ニ包含セラレタル社会政策的価値論ハ向後更ラニ其重要ヲ加フルトモ減ズ可カラザル底ノ根本問題ニ接触スルモノナリ。」（六ページ）（傍点福田）となし、人口論争をこの新たな意義において解釈しこれに清新なる光明を与えたものとして、Friedrich Albert Lange, *J. S. Mills Ansichten über die soziale Frage und die angebliche Umwälzung der Sozialwissenschaft durch Carey*, 1866. を挙げている。こうして福田においては、人口法則と社会改革との対立は、人口法則と社会政策の根本的矛盾の対立として把握され、財産論において最も有力に生存権を主張したゴドウィンは極めて好意的に扱われた。このように福田は、人口論争を社会政策論の一環としてとり上げたところに特徴がある。

＊　＊　＊

その後七年を経て、一九二三年（大正一二年）には、津田誠一が「三田学会雑誌」（一七巻一号）に「『政治的正義』と『人口論』」を書いている。ここで津田は、ゴドウィンについて、その精神改造論に承服しないと言いつつも、次のように言う。「産業革命以後の駸々たる経済事情の発展は、一旦は其影を没せるゴドヰンの理想主義を二十世紀の現代に召還して、更に一層熾烈なる勢威を以て再現するに至ったのである。Karl Kautsky が社会主義的社会に於ては爾今一世紀を閲するも尚人口過剰の憂惧無しと断言するが如きは遙遠の難関に対しては未知の救済手段を予期し得可しと云へるゴドヰンの楽観論を事実の上に立証するものではない乎。更に又 Herbert Spencer が人類の発達は其生殖力を減退し出産率を低下す可しと推論するは、長年月の間には如何なる変化の勃発するや測り難しと云へるゴドヰンの所言を生物学の上に裏書するものでは無い乎。」（一〇三ページ）津田の論文は彼のマルサス論の第一章として書かれた断片的なものながら、ゴドウィンと社会主義的人口論とのつながりを見、ゴドウィンの楽観説の実現の可能性を早くも予想している点は興味深いといえよう。

＊　＊　＊

翌年には、わが国最初のマルサス研究の単行書として、藤村信雄「人口論・『マルサス』説の研究」が現われ、さらにその翌年には神永文三「マルサスの人口論」が出たが、ゴドウィン研究としては特に見るべきものはなく、そのあとを受けた玉井茂「人口思想史論」（一九二六年、大正一五年、四六判三七五ページ）が、その第三篇を「ウィリアム・ゴドウィンの思想」と題し、世に埋もれているゴドウィンの「人口論」を、やや詳しく紹介している。その内容は、第一章緒論（一、人口思想上のゴドウィンの地位）、第二章ゴドウィンの社会思想要略（一、ゴドウィンの社会思想を知るの要、二、「政治的正義」、三、社会的弊害の原因、四、社会改造の必要）、第三章「政治的正義」にあらはれたるゴドウィンの人口思想（一、理想的財産制度、二、理想的財産制度と人口、三、ゴドウィンの考とマルサスの考と類似せる所あれども根本的に異なれり、四、マンデヴィル流の批評に対する答弁、五、理想的財産制度が人口過剰の原因となるべしとの批評に対する答弁、六、以上の要領）、第四章「人口研究」にあらはれたるゴドウィンの人口思想（一、「人口研究」、二、マルサス説に実証的根拠薄弱なりとの考、三、マルサス説を非人道的なりとする考、四、マルサスの所謂人口の幾何学級数的増加を認めず、五、人口増加に関するゴドウィン自身の積極的な意見、六、人口制限の原因、七、生活資料の増加、八、ゴドウィンの人口論の要略、九、ゴドウィンの人口政策）、第五章結論（一、ゴドウィンの人口思想の価値、二、ゴドウィンの理想主義の光輝）と詳細である。彼は、マルサスが生活資料をもって人口を制限するものと主張したのに対し、ゴドウィンは社会制度が生活資料を制限することを高調したと云い、また「人口研究」Godwin, *Enquiry concerning Population, an Enquiry concerning the Power of Increase in the Number of Mankind, being An Answer to Malthus's Essay on that Subject*, 1920.）を、「其の前著『政治的正義』の如く、世に喧伝せられることとなくして、埋もれて居るやうではあるが、」「人口に関する社会主義的思想の先駆をなして居る点に於いて、学問上相当重大な価値を有する」（一六六ページ）として詳しく紹介した。玉井は、「全編矢張り理想家としての臭味を全然脱却することは出来て居ないようである。又其のマルサス説の批評の仕方も稍々公平を欠いで居るやうである……マルサス説中の道徳的節制の部分を比較的軽く見たり、却って幾何学級数的人口増加と云ふやうなことを頗る重大視して居たりなどする点を見るとどうしても公平を欠いで居るとしか思はれない」（一六七ページ）と批判的であって、「歴史的評価を

離れた純然たる学問としての人口論の立場から見るときには、多くの学者の認むるが如く、ゴドウィンの人口思想なるものも、著しく其の光輝を失ふのであつて、要するに其は、マルサス説の誤解から出発した想像論であり、感情論である。彼が一方に於いて、人口制限の必要なきことを認めながら、他方に於いて又理性の発達が終には人間の繁殖を妨ぐるに到るかも知れないと説いて居るが如きに到つては、結局道徳的節制による調和を予想するものであつて、前後大いに議論が矛盾して居ると云はなければならない。」（一九二ページ）と結論した。玉井によれば、ゴドウィンの光輝は実証的人口論ではなく「彼の中心思想――即ち其の社会改造の原理を説く方面」であつて、そこに理想論としての片鱗がある。「人口思想家としての権威が無いにしても、革命思想家としての彼のこの高い地位が奪はれると云ふ時期は、かくして、恐らく、永久に来ないであらう。」（一九三ページ）

玉井のこの書は、日本で最初の本格的な人口論史の記述というばかりでなく、一般に軽視されているゴドウィンの「人口論」に関する最初の叙述でもある。そこには、マルサスに道徳的抑制の考えを教えたゴドウィンの *Thoughts Occasioned by the Perusal of Dr. Parr's Spital Sermons*, 1801. への言及がなく、またゴドウィン評価には不正確な点も多いけれども、ゴドウィンをもつて人口に関する社会主義思想の先駆となし、その人口論を非学問的と言いながらその社会改造の原理を高く評価するという立場は、ここにその出発点が与えられた。

* * *

ついで一九二八年（昭和三年）には、小樽高商教授南亮三郎の「人口法則と生存権論」が出版された。その序において著者は、大正十二年秋小樽高商図書館にて故大西教授の蔵書中からゴドウィンの「人口論」を見出した時の感慨を伝え、

「……あゝ然し、轗軻不遇の裡に纔かに送り得たる彼れが後半生を想ふとき、嘗つては一世を風靡した社会思想家としての彼れ自からの地位をも顧りみる遑なく、晩年を捧げて人口論のより実証的なる研究に着手し生涯の論敵たりしマルサスに猛烈なる駁撃を加ふるに至つた彼れが心情に、誰れか同情の涙を禁じ得ざるものがあろう。

私は異常の感激と熱情とをもつて、貪ぼるやうにそれを読んで行つた。さうして私は、一つには此の不遇の思想家に対する已みがたき同情の念と、今一つには私自身がいつも持つ学問的な或る反抗心から之れを翻訳しようと決心した。」（三ページ）

と述べている。その後著者の興味はマルサスへ向ったため、翻訳を中断、これに代えるはずの「ゴドウィン研究」もついに現われなかった。だが南は、なぜゴドウィンが、不得意な人口の実証的研究によってまでマルサスへの反撃をしようとしたかを問い、それは単なる個人的感情ではなく、「ゴドキンの最後の労作に於て、如何なる社会思想家も、如何なる社会科学者も、一度びは通過せざるを得ざる基本問題の、底深く潜みあるのを見た……曰く、如何なる社会思想の提唱も、如何なる社会改造の企ても、人口問題への究明を措いては意味を為さぬといふこと是れである。」（四―五ページ）と答えている。そこでこの書は、ゴドウィンを正面からとり上げたものではないが、人口法則と生存権を対立せしめ、貧困を社会の罪とし貧を救い生を保障することを社会の義務とすることにおいて、「恐らく一切の社会主義者はゴドキンの後裔である」（本文二ページ）というように、人口法則対生存権、マルサス対ゴドウィンとして、常にゴドウィンを念頭に置いている。そしてほぼA・メンガーの *Das Recht auf den vollen Arbeitsertrag in geschichtlicher Darstellung*, 1904. に従って、Recht auf den vollen Arbeitsertrag, Recht auf Existenz, Recht auf Arbeit の三つの経済的基本権をたどり、ゴドウィンの degrees of property を紹介してこれと照合させ、理智の無限の進歩、人口増加の微弱という二前提によってその平等社会論が樹立されるので、この点でのみメンガーの生存権論と異って、空想的、独断的と呼ばれるという。南は、ゴドウィンの財産平等の理想、メンガーの民衆的労働国家における生存権の高調に同感を示しつつも、「唯だ、マルサスが其の昔ゴドキンに向けたる『人口法則』てふ恐るべき巨砲は今も猶ほ、寸豪も渝はらざる偉力を有しつつある所以を思ひ、之れを顧みることなくしては、生存権論は到底一個の Phantasie に終らざるなきを得るや」（七六ページ）と問うた。そして南の持つ「学問的な或る反抗心」にもかかわらず、南のゴドウィンの翻訳と「ゴドウィン研究」はついに生存権を得るに至らず、「人口法則」の巨砲の重みはついに南をしてその体系をマルサスの上に立脚せしめるに至ったのである。

* * *

この年には、続いて長崎高商教授伊藤久秋の「マルサス人口論の研究」（昭和三年、東京、丸善刊菊判四〇二ページ）が現われた。これは同題の論文（「商業と経済」（長崎）第八年一―二、昭和二年十一月及び三年三月）を改訂したもので、原典に忠実な、最初の本格的なマルサス研究書といえよう。伊藤は、「人口の原理」執筆の動機、内容などを詳しく述べた後、第一篇第六章「平等社会の批評―ゴッドウィン其他」において、マルサスのゴドウィン批判、ゴドウィンの反論（*Thoughts on Dr. Parr's Spital Sermon*, 1801）、マルサスの再論を紹介し、ゴドウィンの反論について、「恰も罪悪と困窮とを救済策として之を讃美することマルサスの論なるが如く誤解せるに基く攻撃」（一四一ページ）と云い、またゴドウィンの prudence の考えを評するマルサスの論について、ゴドウィンは、人性は甚だしく浄化し得、理性の力が万能の作用を発揮するのであるから、「ゴドウィンの平等社会を仮定しながら、此の社会に於ては人の理性は、今日程の働をもなさず、人の本能より出づるところの人口法則の作用は、更に今日よりも強烈に加はり来たるべしと云ふが如きは、明に論理上の誤謬である」（一四六ページ）とハズリットにならって指摘している。

さらに第二篇第二章「マルサスの批評家」においてゴドウィンの「人口論」を紹介し、独断、誤解にもとづくものと述べた。そしてこの「人口論」に附せられた *Dissertation on the ratios of increase in population, and in the means of subsistence*, by David Booth.

および ブースが ゴドウィンと彼自身への反論に対して筆をとった *A Letter to the Rev. T. R. Malthus, being an answer to the criticism, on Mr. Godwin's Work on Population, which was inserted in the LXXth number of the Edinburgh Review, etc.*, London, 1823. ならびにゴドウィンの人口論に刺戟された Piercy Ravenstone, *A Few Doubts to the Correctness of some Opinions generally entertained on the Subject of Population and Political Economy*, London, 1821. の内容を紹介、批判した。こうして、当時の人口論争の内容はかなり明確となってくる。

＊　＊　＊

一九三二年（昭和七年）には、一九二九年来発表された論文がまとめられ、吉田秀夫「経済学説研究」が出版された。吉田は、マルサスの人口理論、歴史理論、経済理論の三者は密接不可離に一体系（人口史観）を形成するということと、その理論は地主階級の階級理論であるということを主張し、その内容については、スチュアート、タウンゼントなどの剽窃であって、「兎に角それには一つの独創的な命題も含まれていない」（一一四ページ）と断定する。そして「人口の原理」の各版の間で、食物対人口の関係から出発するという根本思想には何ら変化がなく、各版は理論的に同質であるという特徴的な見解を発表した。これについては南亮三郎が「国民経済雑誌」（第五四巻第三号、一九三三年）で反論を加え、両者の間で論争が行われることとなったが、吉田の解釈では、人口増加の妨げ――罪悪、窮乏、道徳的抑制――は、理論的には末節の問題である。（「大倉学会誌」改巻第二号、一九三三年）吉田は、人口と食物の増加力の対比、人口の三位一体というマルサスの方法論自体に対する批判に急であって、ゴドウィンの影響による道徳的抑制の導入については、その意義を過小評価していた。彼はマルサスに対する鋭い批判者であるが、さりとてゴドウィンに好意的でもない。なおこの書の第一章第二節は「英国に於けるフランス革命」と題され、フランス革命をめぐるプライス、ペイン、ゴドウィンの論争を紹介した。これは、この興味ある時代の興味ある論争の最初の紹介であろう。（この節は、同じ題で一九三一年に「大倉学会誌」第四巻第二号に発表された。）

ついで翌年の一九三三年には、吉田は「マルサス批判の発展」（弘文堂書房）を出して南の批判に答えると共に、その第一章を「『人口論』を繞る論争」となし、これは、ゴドウィンと終始する（ボナー）人口論争を三期に分け、マルサスの「人口原理」、両者の手紙、ゴドウィンの「人口論」を詳細に紹介している。（この章は「『人口論』を繞る論争――『平等主義』を中心として――」と題されて、「大倉学会誌」改巻第一号（一九三三年）に発表された。）

＊　＊　＊

京都大学の「経済論叢」がマルサス生誕百五十年を祝ってマルサス特集を行ってから二五年ののち、一九三四年には小樽高商の「商学討究」（第九巻中下合冊）において「百年忌記念マルサス研究」が特集され、マルサス研究はさらに前進することとなった。この内容は、マルサスと現代の人口問題（上田貞次郎）、経済学史上に於けるマルサスの地位（堀経夫）、伊太利に於けるマルサスの先駆者（手塚寿郎）、マルサスと其の社会経済史的背景（室谷賢治郎）、マルサスの人口理論（南亮三郎）、マルサスの経済理論（坂本弥三郎）、マルサス対ゴッドウィンの人口論争（伊藤久秋）、マルサス対リカアドオの価値論争（大野純一）、マルサスと古典派の動態理論（高橋次郎）、マルサス以後の人口理論（吉田秀夫）、マルサスとダーウキン及び社会ダーウキニズム（小泉丹）という大部なものである。

この中にあって伊藤の論文は、伊藤の前著における論争観をひきついで、「綿密な文献的素材のうへに明徹な推理を立脚せしめたるよき論文である。」（南亮三郎「人口論発展史」一九三六年、一九二ページ）これは、ゴドウィン＝マルサス論争を、序説、ゴドウィンの立場、マルサスのゴドウィン批判、論争の進展、論争の歴史的意義、とたどり、ゴドウィンを「最も大胆なる形而上学者に匹敵する程の経験を超越したる絶対的教義の建設に傾いた」となし、この論争は「二つの異なる頭脳の争」「二つの異なる世界の背反」であると強調する。南は、マルサスは道徳的抑制を認めたことによって、ある意味ではゴドウィン説の信奉者になり、「人口の原理」の二版以後は、道徳的抑制が私有財産制度によって初めて維持されるがゆえに共産主義を非難したとして、初版の対立と二版以後の論争を区別した（「国民経済雑誌」第四六巻第五号）が、伊藤はこれについて触れ、私有財産制度が結婚を抑制して人口増加による社会の損害を防ぐという論拠は初版においてすでに存在しており、また二版以後においてもゴドウィンに対するマルサスの論拠は変化せず、単にマルサスの攻撃力が減じただけだと批判した。伊藤によれば、マルサスとゴドウィンはその主要点において一致するが、道徳的抑制はマルサスにおいては利己心にもとづき調節的作用を認めるにすぎないと指摘、両者の対立は「結局人性に対する根本見解の相異に帰着する」と説く。さらにゴドウィンの「人口論」について触れ、「混乱と矛盾の堆積に過ぎず」「マルサス対ゴッドウィンの論争の中からは寧ろ削除されて然るべきもの」「『論争』の感情的延長としての産物」と非難し去る。

この論争の歴史的意義について、伊藤は、マルサスの〝勝利〟をもって、自由主義経済学の強化、楽観説に対する悲観説の勝利、「形而上学」に対する「経験」の勝利となし、マルサスがスミスを離れゴドウィンを排したことによって、自由主義経済学は新しい進路――ベンサム――の上に置かれ、財の生産以外に重大問題として分配問題の存在に気づいた新時代の関心を反映して、経済学の視野を拡大する一転期となったと評価する。そして、L・スティーヴンの次のような言葉を引いてその稿を終る。――「この論争一たび開くるや、経済学は最早分離した学問と見得ないことが明らかとなった。その学説は当時の一切の政治的社会的大問題に参加した。……かくて私は政治学の歴史におけると同じく一新時代の生誕に臨むわけである。」（*English Thought in the Eighteenth Century*, Vol. II, p. 327.）

以上のように、伊藤は前著に引き続きこの人口論争を詳細に展開した功績をもつが、ゴドウィンに対する評価は消極的であって、マルサスへの影響も重要視せず、「ゴドウィンは形而上学者であり、その全傾向に於て経験を超越し、歴史を蔑視した。……まことに彼

は如何なる形而上学者にも劣らざる空理的頭脳である」といっている。こうして、人口論争は形而上学と経験の対立となり、彼にとってゴドウィンは、単にマルサスの攻撃力を減じさせただけのもの、また経済学を経験的に発展させるための否定的媒介にすぎないものであった。

＊　＊　＊

以上のように、人口論史研究上におけるゴドウィン論は大正末期から昭和初期の約十年間に限られ、その後は戦争の影響もあって研究は存在しない。そこで以上を通観すると、日本におけるゴドウィン研究は、マルサスとの人口論争研究の分野において最も活発であったが、そこにおいてもまとまったゴドウィン論は生まれなかったということになる。福田は社会政策論の立場からゴドウィンの生存権説を論じたが、これは一面的な議論であるし、一般には、ゴドウィンを社会主義的人口論の先駆としてその理想を評価しながらも、人口論としては実証性を欠く空論に過ぎずと批判する説が多かった。そこで人口論争そのものは、社会改革における人口問題の重要性を教え経済学を発展せしめるに功があったとして、マルサスの勝利を疑わなかったのである。この間にあって、断片的ながらもゴドウィンの空想に賛意を表した津田の論文は、異色のものといえよう。

それではこの論争の意義は、単に経済学を前進させただけであろうか。今日ふり返ってみて、われわれはこの論争の中から、次の点を指摘することができよう。

一、この論争は、産業革命の進展を背景に、貧困、苦況、道徳的頽廃の問題を中心の課題とし、資本主義の矛盾をその直接の対象とすることによって、スミス以後の時代[注1]を明白に特徴づけている。

二、この論争は、「イギリスにおけるフランス革命」という激しい対立の時代を背景に、急進主義的人口論と超越的人口論の尖鋭な対立の原型を形成している。

この場合急進主義的人口論というのは、人間性は可変であり生産力は急激に増大することが可能であるからマルサスの言うような人口法則は貧困の原因たりえず、主として社会制度の変革によって貧困の問題は解決されるとするもので、社会主義の人口論はほとんどこれに属する。

これに対し超越的人口論というのは、逆に食糧（生活資料）と人口を超越的に対比し、人間性の不変と生産力は急激に発展しえないということを前提として、貧困の社会的原因を見ないものをいう。マルサスの人口論は、ゴドウィンに比する時、表面上は確かに〝経験的〟〝実証的〟であるが、このような超越的方法によったため、貧困および過剰人口の歴史的社会的性格をおおいかくし、既成秩序と支配階級を擁護するための、全く非科学的なものであった。

これに比するとゴドウィンの人口論は、彼が経済学者ではなかったため人口の実証的分析の手法においてはマルサスに劣るとはいいながら、貧困と私有財産制度の因果関係を重視することによって歴史的人口理論の方法を準備し、共産主義社会の生産力の飛躍的発展、人間性の変革というヴィジョンにおいてその後の社会主義的人口理論の原型を確立したというべきであろう。ゴドウィンの致命的な欠陥はいうまでもなく資本主義の経済的分析の欠如であるが、この点を補ったマルクス主義の人口論も、ゴドウィンと同じく、将来の生産力の発展と人間性の変革、道徳的抑制を期待していたのである。[注2]

注（1）　戦後においてこの人口論争を独自な角度から扱ったものとして、内田義彦の「古典学派の完成――マルサス・ゴドウィン論争――」（同著「経済学史講義」未来社、一九六一年所収）がある。内田はこの論争をリカードゥ研究の一部としてとらえ、それによれば、「スミスの中の小生産者的要素、歴史的自然法の要素、ヒューマニスティックな要素は、この段階ではブルジョアジーの手からはなれて、小生産者的無政府主義の思想としてうけつがれてくる」（二五六ページ）、「これに対するマルサスの挑戦は、資本制を自明なものとするイギリス経験論に自然法の論理を引渡したもの」（二六八ページ）で、「その限り、リカードゥはマルサスの結論を出発点にしている……但し、その上で、対立が生じる。……リカードゥにとっては、ゴッドウィン流の無政府主義＝資本家的所有の否定でもなく、マルサス流の現状容認でもなく、地主利益のために行われている高い穀物関税の撤廃と、そのための議会改革こそが、とられるべき政策であり、……リカードゥの理論は、ゴッドウィン・マルサス理論の両面批判をふくんでいる。」ただしここでは、ゴドウィンの基本思想は自然法ではなく功利主義であること、マルサスは必ずしも現状容認ではなく、救貧法批判にとどまらず、「ブルジョア的生産の諸矛盾を暴露することに興味をもった」（マルクス「剰余価値学説史」第三巻）ことを注意すべきであろう。

（2）　拙著「ウィリアム・ゴドウィン研究」（一九六四年）、一八四ページ。